様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：62618
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22320085
研究課題名（和文）　Ｎ型アクセントに関する総合的調査研究

研究課題名（英文）　General Study on N-pattern Accent in Japanese

研究代表者
木部　暢子（KIBE NOBUKO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・時空間変異研究系・教授
研究者番号：30192016

研究成果の概要（和文）：Ｎ型アクセントの定義をした後、４つの特性を検討し、次のことを明らかにした。(1)文節性の特徴が最も広く認められる。(2)系列化は、自立語が単語単位で後ろから核の位置が指定されている場合や助詞が名詞に低接する場合、例外になる。(3)複合アクセント法則と活用形の一貫性は例外が多く、少なくとも本土方言では類の統合の仕方という史的要因に拠っている。最後に九州の２型アクセントと隠岐島の３型アクセントの歴史を考察した。

研究成果の概要（英文）：After defining an N-pattern accent as a system where only N oppositions exist irrespective of the length of the accentual unit, we examine four characteristics cross-dialectically and argue that: (1) The accentual unit is a *bunsetsu*, which is found pandialectally; (2) Serialization basically holds true for the system, but not, when a noun has an accent kernel specified from the end of the word; (3) Both the compound accent rule to the effect that the accent of a compound inherits the accent of its first member, and accent pattern congruity in conjugation have many exceptions. Both depend on how the dialect underwent historical changes, at least in Mainland Japanese. Finally, the histories of two-pattern accent systems in Kyushu and three-pattern accents in Oki-no-shima are considered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2012 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
年度			
年度			
総　計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：２型アクセント・３型アクセント・文節性・系列化・複合アクセント法則・活用形の一貫性・琉球語系列別語彙

１．研究開始当初の背景

現代標準日本語のアクセントは、単語の長さが長くなればアクセント型の数も増加するタイプのアクセント体系を持っている。例えば、標準語には、１拍語に２種類の型、２拍語に３種類の型、３拍語に４種類の型、ｎ拍語にｎ＋１種類の型がある（表１）。

表１　標準語のアクセント体系

１拍語	２拍語	３拍語
[エ(柄)	ト[リ(鳥)	ク[ルマ(車)
[エ](絵)	ヤ[マ](山)	オ[トコ](男)
	[ア]メ(雨)	コ[コ]ロ(心)
		[モ]ミジ(紅葉)

※音調の上がり目を［ で、下がり目を ］ で表記する。以下同じ。

これに対し、日本語諸方言には、語の長さに関わらず、型の数がN箇と決まっているようなアクセントがある。これをN型（えぬけい）アクセントという。例えば、鹿児島市方言では、１音節語も２音節語も３音節語も（鹿児島市方言の韻律の単位は拍ではなく音節）、ｎ音節語も型の種類は２種類と決まっている。つまり、ｎ音節語に２箇の型がある。このようなアクセントを２型アクセント（Ｎ＝２のN型アクセント）という（表２）。

表２　鹿児島方言のアクセント体系

	１音節語	２音節語	３音節語
A	[エ](柄)	[ト]リ(鳥)	ク[ル]マ(車)
B	[エ(絵)	ヤ[マ(山)	オト[コ(男)

また、隠岐島五箇方言では、２拍語も３拍語もｎ拍語も、型の種類は３種類と決まっており、３型アクセント（Ｎ＝３のN型アクセント）である（表３）。

表３　隠岐島方言のアクセント体系

１拍語	２拍語	３拍語
	[トリ～ [ト]リ[ガ(鳥)	[ク]ル[マ (車)
[エ]～ [エ]ガ（柄）	[ヤ]マ～ ヤ[マ]ガ(山)	モ[ミ]ジ (紅葉)
[エ～ [エ]ガ（絵）	[ア]メ～ [ア]メガ(雨)	[ネ]ズミ (鼠)

※１拍語は　２種類の型しか持たない。

N型アクセントは、福井市周辺、島根県隠岐島、離島を含む西南部九州、奄美、沖縄に分布することが、これまでの調査から明らかになっている。上野（1984）は、これらに共通する特性があることを指摘している。しかし、なぜ、N型アクセントのような標準語と性質を大きく異にするアクセントが西日本に偏って分布するのか、これらはどのようにして生じたのかは、いまだ十分には解明されていない。

一方、アクセントは従来、言語の諸特徴の中でも変化しにくい部分だと言われてきたが、近年は、アクセントにも共通語化の波が押し寄せている。N型アクセントは、上に述べたように、西日本の離島や奄美、沖縄といった過疎化が著しい地域に分布している。これらの地域では、アクセントも含めて、方言全体が消滅の危機に直面しており、調査や記録、データの収集を急ぐ必要がある。

２．研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究では次のことを目的として、N型アクセントの調査・分析、記録・保存を行う。

(1) N型アクセントの形成過程を明らかにする。そのために、各地のN型アクセントの特性をより詳細に記述する。

(2) N型アクセントの観点から、日本語諸方言の形成過程がどう解明されるのかを明らかにする。

(3) 消滅の危機に瀕したN型アクセント方言の音声データの収録とデータベースの整備を行う。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では以下の方法で研究を進める。

①従来、調査報告の少なかった福井市周辺、島根県隠岐、九州の離島、奄美等のN型アクセントの調査を行い、分析を行う。

②国内学会、国際学会で研究発表や公開ワークショップを行い、研究方法や結論の妥当性について検証を行うとともに、研究水準の向上を図る。

③N型アクセントの音声資料のデータベースを整備し、データをＨＰで公開する。

４．研究成果

(1) N型アクセントの定義

最初に、本研究で対象とするN型アクセントの定義を行っておく。N型アクセントの定義は、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数（N）以上に増えていかない体系」である。Nは任意の整数で、Ｎ＝１が１型（いっけい）アクセント、Ｎ＝２が２型（にけい）アクセント、Ｎ＝３が３型（さんけい）アクセントである。日本語では、４型以上のN型アクセント体系は、まだ報告されていない。また、東日本にN型アクセントが存在するという報告はない（近年の韓国語の方言研究では、４型、５型アクセントが種々報告されている）。Ｎ＝０だと無型（無型）アクセント、すなわち無アクセントになるが、これはN型には含めない。

(2) N型アクセントの特性

上野（1984）により、各地のN型アクセントには①文節性、②系列化、③複合アクセント法則、④活用形における一貫性、といった共通の特性があることが指摘されている。本研究では、新たに以下のことが明らかとなった。

①文節性が最も広く認められる。

②系列化は、N箇の系列のうちの一部で例外になる場合がある。

③複合アクセント法則と④活用形の一貫性は例外が多く、N型アクセントの一般特性とは見なしがたい。③、④は、少なくとも本土方言では類の統合の仕方という史的要因に拠っている。

以下、若干の説明を加える。

文節性とは、助詞･助動詞、およびそれらの連続が固有のアクセントをもたず、それらが自立語に接合した文節全体で１つのアクセント単位になり、その文節のアクセントはその自立語のアクセントによって決まることをさす。例えば、鹿児島県吹上町方言は、表４に示すような２型アクセント体系で、助詞･助動詞が接続した場合には、表５に示すように文節全体が１つのアクセント単位になる。この特徴がＮ型アクセントに最も広く認められる現象である。

表４　吹上町方言のアクセント体系
Ａ：[○]]　[○]○　○[○]○　○○[○]○
Ｂ：[○　　○[○　　○○[○　　○○○[○
(○は１つの音節を、]]は音節内下降を表す)

表５　鹿児島県吹上町方言の文節性
Ａ：[葉]モ　葉[カ]ラ　葉カ[ラ]モ
　　葉カラ[デ]モ　　葉カラデサ[エ]モ
Ｂ：歯[モ　歯カ[ラ　歯カラ[モ
　　歯カラデ[モ　　歯カラデサエ[モ

次に、系列化とは、p 拍の自立語(名詞)に q 拍の助詞類が付いたアクセントは、同じ系列の（p+q）拍名詞のアクセントと同じになる（Np+Pq=Np+q）現象をさす（表６）。

表６　吹上町方言の系列化
Ａ：[葉]モ＝[カ]ゼ　葉[カ]ラ＝サ[カ]ナ
　　葉カ[ラ]モ＝サカ[ナ]ガ＝カゼ[ヒ]キ
Ｂ：歯[モ＝ヤ[マ　　歯カ[ラ＝オト[コ
　　歯カラ[モ＝オトコ[ガ＝ヤマミ[チ

系列化には、例外がいくつかある。例えば、琉球方言に属する喜界島(行政上は鹿児島県)の湾方言では、β 系列では名詞の核の位置が次末拍に固定されているため、系列化が成り立たない。また、鹿児島県中種子方言のα系列や鹿児島県屋久島宮之浦方言のＢ系列では、助詞が名詞に低接するため、系列化が成り立たない。

複合アクセント法則とは、複合語のアクセントはその前部要素のアクセントを引き継ぐという法則である（表７）。

表７　吹上町方言の複合アクセント法則
Ａ：鹿児島 → カゴシマダイ[ガ]ク
　　宮崎　 → ミヤザキダイ[ガ]ク
Ｂ：福岡　 → フクオカダイガ[ク
　　大分　 → オーイタダイガ[ク

複合アクセント法則は成り立たない方言も多い。例えば、隠岐島の知夫里（ちぶり）島では、全部要素により複合語全体の型が決まるという規則は見られない。複合アクセント法則は、古くは「式保存法則」と呼ばれているもので、これは、Ｎ型アクセントではない岩手県雫石方言や島根県松江市方言などにも見ることができる。これらの方言では、歴史的な「式保存法則」を受け継いだものと考えられる。少なくとも本土方言に関しては、複合アクセント法則の成否に関して歴史的な説明が可能である。

活用形における一貫性とは、活用形のアクセントがＡ、Ｂでそれぞれ一貫することをさす。したがって、活用形のどれか１つのアクセントが分かれば他も分かるという関係になっている（表８）。

表８　吹上町方言の活用形の一貫性
Ａ：[売]ル、[ウ]ラン、[ウッ]タ、ウ[レ]バ、
　　[ウ]レ、ウ[ラ]スッ
Ｂ：取[ル、ト[ラン、トッ[タ、トレ[バ、
　　ト[レ、トラ[スッ

これも、平安末期京都方言の高起は高起、低起は低起で、活用形のアクセントが一貫していたことの反映である。九州二型アクセントは、これをよく反映しているが、隠岐島方言や喜界島方言では、これが成り立たない。隠岐島方言の活用形のアクセントは、祖形から規則的なアクセント変化を経たために出てきた結果であって、そのため共時的な一貫性が成り立たない。

以上のように、③系列化と④活用形における一貫性は、Ｎ型の中でもそれが認められない方言があり、Ｎ型アクセントの一般特性とは見なしがたい。少なくとも本土方言のＮ型アクセントに関しては、③、④は祖体系からの歴史的変化の結果を反映するものであって、Ｎ型でない方言でも、歴史的な変化の過程により、③、④が成り立つ場合もある。

(3) 西南部九州の２型アクセント

西南部九州２型アクセント地域には、大きく、鹿児島タイプの２型と長崎タイプの２型の２つがある。本研究では、鹿児島タイプの例として､鹿児島市方言､種子島中種子方言、長崎タイプの例として天草市本渡方言、屋久島宮之浦方言において、Ｎ型アクセントの一般特性（①文節性、②系列化、③複合アクセント法則、④活用語におけるアクセント系列の一貫性）が成立するか否かを明らかにし、４方言の共通点と相違点を整理した。また、①、②、④に深く関係している助詞・助動詞接続形のアクセントについて、対応関係を明らかにした。

まず、４方言における①文節性、②系列化、③複合アクセント法則、④活用語におけるアクセント系列の一貫性の成否は、表９に示すとおりである。

表９　西南部九州方言の特徴の比較

	本渡	鹿児島	中種子	宮之浦
タイプ	長崎	鹿児島		長崎
文節性	○	○	○	○
系列化	○	○	△	△
複合法則	△	○	○	○
活用語	○	○	○	○

※○はその特性を備えていることを、△はその特性を備えているが、一部、特性が成り立たない場合があることを表す。

鹿児島市方言は４つの特性のすべてを備え、例外もきわめて少ない。典型的なＮ型アクセントの方言である。本渡方言も４つの特性をすべて備えているが、前部要素が３拍以上の複合語になると、複合語がすべてＢ型になり、アクセント法則が成り立たない（表10）。

表 10　前部要素が３拍以上Ｂ型の複合語＝すべてＢ型
[アメリカジン(アメリカ人)、[イチゴケーキ(苺ケーキ)、[オトコトモダチ(男友達)、[オレンジバタケ(オレンジ畑)、[クリスマスケーキ、[タノミジョーズ(頼み上手)、……

中種子方言と宮之浦方言も４つの特性を備えているが、非下降型の名詞では、系列化が成り立たない。これは、名詞に対して助詞が低く続くためである（表 11、12)。

表 11　中種子方言の系列化の例外
α型（非下降型）
[ト]ガ(戸が)≠カ[ワ(川)
カ[ワ]ガ(川が)≠オ[ナゴ(女)
オ[ナゴ]ガ(女が)≠ク[チビル(唇)
ク[チビル]ガ(唇が)≠ア[バラボネ(肋骨)

表 12　宮之浦方言の系列化の例外
Ｂ型（非下降型）
メ]ガ(目が)≠ハナ(花)
ハナ]ガ(花が)≠オトコ(男)
オトコ]ガ(男が)≠アサガオ(朝顔)
アサガオ]ガ(朝顔が)≠クスイユビ(薬指)

助詞・助動詞接続形のアクセントについては、断定の「ジャ」、推量の「ジャロ」、質問の「カ」、伝聞の「ゲナ、チュ」、引用の「テ、チ」接続形がどの方言でも系列化の例外となる。これらは直前の名詞や動詞だけを受けるのではなく、文全体を受ける助詞・助動詞であり、アクセント的独立性が高いと考えられる。

アスペクトを表す「ヨル、トル」は、鹿児島市と中種子では独立、本渡では「ヨル」が非独立、「トル」が独立である。この違いは、「ヨル、トル」の動詞接辞化の進展速度の違いを表している。

(4) 福井県越前町の３型アクセント

「3 型アクセント」は、地理的には琉球語に点在するが、本土方言においては、知夫里島をのぞく隠岐方言（広戸・大原 1953）だけが知られていた。しかし、本研究により、福井県越前町小樟（ここのぎ）のアクセントが新たに「3 型アクセント」であることが明らかになった。小樟方言のアクセント体系は、表 13 のとおりである。

表 13　小樟方言のアクセント体系

型	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	…
A	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	…
B	[○	○[○	○[○○	○[○○○	…
C	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○]○○	…

Ｃ型の音調は、２拍、３拍ではＡ型と同じ音調に聞こえる（Ａ［ハ]コ(箱)＝Ｃ［フ]ネ(船)、Ａク[ル]マ(車)＝Ｃヒ[ダ]リ(左))。また、２拍名詞の１拍の助詞付きの形は、ＣでもＡと同様に、単独の下降の位置が１拍後ろへずれる形をとる（Ａ［ハ]コ、ハ[コ]ガ、Ｃ［フ]ネ、フ[ネ]ガ)。しかし、２拍名詞＋２拍助詞、３拍名詞＋１拍助詞など、全体で 4 拍になると、Ａでは下降の位置が右にずれていくのに対し、Ｃではずれていかない（表 14)。

表 14　小樟方言の名詞＋助詞のアクセント
Ａ：ハ[コカ]ラ(箱)　ク[ルマ]ガ(車)
Ｃ：フ[ネ]カラ(船)　ヒ[ダ]リガ(左)

上野（1984）のＮ型アクセントの一般特性のうち、文節性については、小樟方言にも成り立つ。小樟における文節性でユニークな点は、１拍名詞において、類別語彙の１～３類の３つの区別を保証していることである。１拍語は、実現形に短い形（短形）と長い形（長形）をもち、普段多く用いられるのは長形である。どちらも、助詞接続形で３つの区別を持っている（表 15)。

表 15　小樟方言の１拍名詞のアクセント
短形
Ａ：「蚊」[カ]]　カ[ガ]～[カ]ガ　デル
Ｂ：「葉」[ハ　ハ[ガ　]デル
Ｃ：「目」[メ]]　[メ]ガ　デル
長形
Ａ：「蚊」[カー]]　[カーガ]　デル
Ｂ：「葉」[ハー　[ハーガ　]デル

Ｃ：「目」［メー］］　［メー］ガ　デル

現在知られているアクセント体系のうち、１拍名詞で３つの対立を明示できるのは、京都アクセントのような「式」の対立をもつか、小樟のような３型アクセントだけだと思われる。

系列化については、おおむね成り立つと言える。ただし、１拍名詞＋助詞、「蚊が」のときに例外となる（表 16）。

表 16　小樟方言の系列化

蚊［ガ］≠［ハ］コ（箱）
蚊［ナ］ラ＝ハ［コ］ガ（箱）＝ク［ル］マ（車）
蚊［ニナ］ラ＝ハ［コナ］ラ（箱）＝
　ク［ルマ］ガ（車）＝カ［ネモ］チ（金持ち）

複合アクセント法則については、調査がまだ不十分である。

活用形の一貫性については、成り立たない（表 17）。その理由は、隠岐島方言の３型アクセントと同じで、歴史的な由来を引き継いでいることに素因があると考えられる。

表 17　小樟方言の活用形の一貫性

着る：	Ａ［キ］ル	キ［ルト］キ
	Ａ［キ］ン	キ［ント］キ
	Ｂ キ［タ	キ［タトキ
見る：	Ｃ［ミ］ル	ミ［ル］トキ
	Ｃ［ミ］ン	［ミン］トキ
	Ｂ ミ［タ	ミ［タトキ

(5) Ｎ型アクセントの形成過程

Ｎ型アクセントがどのようにして形成されたかは、方言によりその過程が異なると考えられる。西南部九州２型アクセントのＡ型に関しては、下降式をもつ祖体系から、次のような変化を遂げて成立したものと考えられる。

表 18　西南部九州のＡ型の形成過程

本土ア祖体系		二型アＡ型の祖形
**［○○!○○○	＞	*［○○］○○○
**［○○!○○］○	＞	*［○○］○○○
**［○○!○］○○	＞	*［○○］○○○
**［○○］○○○	＝	*［○○］○○○
**［○］○○○○	＞	*［○○］○○○

（!は半下降を表す）

Ｂ型は、本土アクセント祖体系に推定される低起群の数が多く、途中過程はいろいろありうるが、下降･上昇の遅れが途中で止まることなく進み、比較的すみやかに祖形 *○○○○［○に至った可能性があると考える。

隠岐島３型は、祖体系から下降と上昇の遅れと、（その上昇位置によって条件付けられた）前部の持ち上がりによって今の隠岐諸方言が派生されたと考えられる。

(6) 琉球Ｎ型アクセントの系列別語彙

琉球のＮ型アクセントに関しては、今後の調査研究にまつところが大きい。琉球諸方言には、本土の類別語彙に存在しない独自の語彙が数多く存在し、また、本土方言とは異なる類別語彙の合流の仕方が見られることが、これまでに判明していて、調査方法自体を精査する必要があるからである。

本研究では、琉球独自の（特に拍数の多い（長い））語を含む基礎語彙のリスト「系列別語彙」を作成（試作）し、今後の琉球語調査に広く使用してもらうこととした。このリストは、琉球祖語にまで遡ることができると推定できる同源語について、アクセント型別に並べたものである。

奄美の沖永良部島や徳之島諸方言では、３種類の系列のアクセント型の区別が行われている。これは、琉球祖語から引き継いだ３つのアクセント型の区別を現代に引き継いだものである可能性が高く、「系列別語彙」推定のための有力なデータとなる。

また、喜界島諸方言は、現在は２型アクセントだが、島の中にアクセント類別語彙群が［Ａ・Ｂ/Ｃ］のように合流した方言と［Ａ/Ｂ・Ｃ］のように合流した方言とがある。このことから、喜界島祖語は［Ａ/Ｂ/Ｃ］のような３種類の系列の区別を持つ体系だったと推測される。したがって、喜界島諸方言も、「系列別語彙」推定のための有力なデータとなる。

以上のようにして、Ａ系列、Ｂ系列、Ｃ系列の３系列からなる「系列別語彙」リストを作成した。その一部を示すと、表 19 のとりである。

表 19　琉球語の「系列別語彙」

Ａ系列：垢・煤・体の汚れ（hiNgu(Fuguru)、higuru(higiru)、hiNgui)、蟻(anji、ani)、尾(duR、zjui)、丘(mui(muri))、夫(wutu、utu)、釜(hagama)、　竈(hamadu、kamadu)、紙（habi、kabi）…、新しい（miRsaN)、薄い(hisjisaN)、うるさい(hamarasjaN)、嬉しい・楽しい（hoRrasjaN)、恐ろし（nuNgisaN）……

Ｂ系列:明日(acja、acjaR)、頭･顔(hamacji、hamacjiR)、家(jaR)、腕(heNnjaR、keRnaR)、鱗･ふけ(iQki、iRkiR、iricjiR)、男(jiNga、jiNgaR、jikigaR)、女(wunangu、wunaguR、inaguR）……
温かい(nukusaN)、おいしい(m’aRsaN)、多い（FuRsaN)、大きい（FuisaN)、大きい（magisaN)、遅い（niQsaN）……

Ｃ系列：あおさ（aRsaR、oRsa、aRsa)、暁（aRtucji、aRtuki、akatuNcji）、顎(utungeR、utuge)、朝(tumiti、sjitimiti)、

頭(cjiburu、suburu)、苺(icjubi、icjobi)……

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）
①上野善道,奄美喜界島佐手久方言のアクセント,国語研究,査読有,76,2013,1-15.
②上野善道,与那国方言のアクセント資料(2),琉球の方言,査読有,37,2013,109-142.
③ Zendo Uwano, Three types of accent kernels in Japanese, *Lingua*, 査読有, 122, 2012, 1415-1440.
④ Haruo Kubozono, Varieties of pitch accent system in Japanese, *Lingua*, 査読有, 122, 2012, 1395-1414.
⑤木部暢子,西南部九州２型アクセントの特性の比較－助詞・助動詞のアクセントを中心として－,音声研究,査読有,16-1,2012, 80-92.
⑥上野善道,Ｎ型アクセントとは何か,音声研究,査読有,16-1,2012,44-62.
⑦新田哲夫 ,福井県越前町小樟方言のアクセント,音声研究,査読有,16-1,2012, 143-154.
⑧五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラールトマ・久保智之,琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない,音声研究,査読有,16-1,2012,134-148.
⑨松森晶子,琉球語調査用「系列別語彙」の素案,音声研究,査読有,16-1,2012,30-40.
⑩窪薗晴夫,鹿児島県甑島方言のアクセント,音声研究,査読有,16-1,2012,93-104.
⑪木部暢子,天草市本渡方言のアクセント－動詞句のアクセント－,国立国語研究所論集,査読有,2,2011,49-76.
⑫松森晶子,隠岐島五箇方言の『式保存』とその例外について,音声研究,査読有,15-3, 2011,74－75.

〔学会発表〕（計６件）
①新田哲夫・中井幸比古,アクセントの式の中和－中央式アクセントと垂井式アクセントの中間アクセント,日本言語学会ワークショップ,2012 年 11 月 25 日,九州大学.
②Nobuko Kibe, Intonation system of the Kagoshima Dialect in Japan, FONETIK2012, 2012 年 5 月 30 日, University of Gothenburg, Sweden.
③Zendo Uwano, ‘Weak’ Units and Accent Shift, FONETIK2012,2012 年 5 月 30 日, University of Gothenburg, Sweden.
④木部暢子,日本語イントネーションのタイポロジー―疑問文のイントネーション―, 2011年台大日本語文創新国際シンポジウム（招待講演）,2011年11月4日,台湾大学,台湾.
⑤Akiko Matsumori, The accentual system of Tokunoshima Okazen dialect in which the accent is uniquely marked with vowel duration,The 20th International Conference on Historical Linguistics, 2011 年 7 月 29 日, 国立民族学博物館.
⑥ Yosuke IGARASHI, Yukinori TAKUBO, Yuka HAYASHI and Tomoyuki KUBO, Ikema Ryukyuan has three, not two lexical tones, The 17th Workshop on East Asian Languages(WEAL), 2011 年 3 月 18 日, University of California, LA.USA.

〔図書〕（計１件）
①松森晶子,新田哲夫,木部暢子,中井幸比古,日本語アクセント入門,三省堂,2012, 223 頁.

６．研究組織
(1)研究代表者
木部　暢子（KIBE NOBUKO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・教授
研究者番号：30192016
(2)研究分担者
上野　善道（UWANO ZENDO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・客員教授
研究者番号：50011375
久保　智之（KUBO TOMOYUKI）
九州大学・人文科学研究科（研究院）・教授
研究者番号：30214993
新田　哲夫（NITTA TETSUO）
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号：90172725
松森　晶子（MATSUMORI AKIKO）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：20239130
(3)連携研究者
窪薗　晴夫（KUBOZONO HARUO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・教授
研究者番号：80153328